

報告 Report

山陰海岸学習館には何が求められているのか？  
—アンケート調査に基づく“来館者の声”の分析—

和田 年史

〒681-0001 鳥取県岩美郡岩美町牧谷1794-4 鳥取県立博物館附属 山陰海岸学習館

E-mail: wadat@pref.tottori.jp

[受領 Received 10 January 2007 ; 受理 Accepted 14 February 2007]

What is expected of the Coastal Branch of Tottori Prefectural Museum?  
—Analysis of visitor's demands based on questionnaire—

Toshifumi WADA

Coastal Branch of Tottori Prefectural Museum, Makidani 1794-4, Iwami-cho, Tottori, 681-0001 Japan

■はじめに

山陰海岸学習館（以下、学習館）は2006年4月から鳥取県立博物館（以下、県博）に付置された施設で、県博の新しい海の活動拠点となることが期待されている。学習館が位置する浦富海岸（鳥取県岩美町）は複雑に入り組んだ海蝕地形と透明度の高い海中景観が特徴で、山陰海岸国立公園を代表する海岸の一つとして知られている（森田・立松 1995）。また、多様な自然環境に囲まれた山陰海岸には多くの動植物が生息している（鳥取県 1993a, b ; 清末 2000）。これらの恵まれた立地環境を活かして体験学習等の教育普及活動を展開し、自然を愛する人々の交流の場として地域社会に貢献し、かつ山陰海岸に関する学術的な情報を他地域に広く発信し続けることが県博に付置された学習館の目的であると考えられる。そこで、県博では学習館に学芸員と海洋生物の専門員を配置し、山陰海岸（特に浦富海岸）の豊かな自然に親しむイベントを開催するとともに、学習館の設備や展示内容の充実に取り組み始めた。

上述したように、学習館は豊かな自然に囲まれているので、観察会などの野外活動には適している。しかしその一方で、母体となる学習館の施設自体は前身である山陰海岸自然科学館（以下、旧自然科学館）（1981年開館、鳥取県生活環境部公園自然課管轄）をそのまま引き継いだものであり、開館から25年以上が経過した設備や展示内容については老朽化が深刻な問題となっている。

旧自然科学館は山陰海岸国立公園の来訪者に対し、

公園に関する知識の普及と自然保護思想の啓発を図ることを目的として鳥取県が設立した施設で、国のビジターセンターとしての役割も果たしていた。旧自然科学館の展示室には山陰海岸の地形や日本海の生きものに関するパネルや模型が多数設置され、館内入口付近には魚類などが観賞できるミニ水槽が並べられていた。さらに、1989年に増設された映像ホールではマルチスライドによる山陰海岸の美しい映像が流されていた。これらの展示内容も現在の学習館がそのまま引き継いでいるが、パネルや模型は開館当時から更新されておらず、映像ホールに関してはマルチスライドの老朽化で閉鎖されている。

老朽化した施設の改修や展示内容の更新に際しては、利用者のニーズに応えることが公共施設としての重要な使命であるため、利用者が学習館に何を求めているのかを事前に把握しておく必要がある。そこで、本報告では旧自然科学館から学習館への移行直前に実施されたアンケート調査に基づいて“来館者の声”を分析し、学習館のリニューアル案および方向性について考察する。

■材料と方法

本アンケート調査は2003年4月から2006年3月末までの間に旧自然科学館の来館者に対して任意で実施され、合計709名からの回答が得られた。回答者は男性よりも女性の方がやや多く、それらの年齢層は10歳以下から70歳以上までと幅広かった（図1a, b）。回答者の居住地は県内（41.1%、未記入を除く n = 603）よりも県

表1. 山陰海岸自然科学館（山陰海岸学習館）のリニューアルに関連するアンケート項目と選択肢一覧

- Q1. 浦富海岸でいいと思うことは何ですか？  
a 動物（魚など）； b 植物； c 地形・地質； d 歴史； e 文化； f 風景； g レジャー（海水浴など）； h 宿泊施設； i その他
- Q2. 山陰海岸国立公園（浦富海岸）のどんなことを知りたいですか？  
a 動物（魚など）； b 植物； c 地形・地質； d 歴史； e 文化； f 風景； g レジャー（海水浴など）； h 宿泊施設； i その他
- Q3. 山陰海岸自然科学館にどんな展示があればいいと思いますか？  
a 水槽の展示（生きている魚など）； b パネル展示（動植物、歴史、文化、風景など）； c 体験型展示（例ハンドルを回す、においをかぐ）； d 立体地形模型（砂丘、海岸の成り立ち）； e 映像（動植物、歴史、文化、風景など）； f その他
- Q4. 山陰海岸自然科学館に入った感想をお聞かせ下さい。  
a おもしろかった； b あまりおもしろくなかった； c 全くおもしろくなかった
- Q5. [Q4でb,cを選んだ方にお尋ねします] つまらなかったのはなぜですか？  
a 情報が少ない； b 展示レイアウトがわかりづらい； c 展示写真が古い； d 興味、魅力のある展示物がない； e 体験して楽しめる展示物がない； f 内容がむずかしい； g その他
- Q6. 山陰海岸自然科学館にまた来たいと思いますか？  
a 思う； b 思わない； c 回答なし

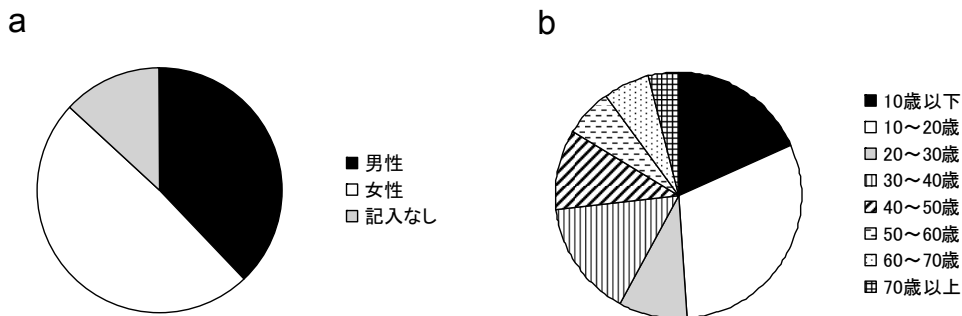


図1. アンケート回答者の性別(a)と年齢組成(b)

外（58.9%）の方が多かったが、ここでは県内・県外を問わず、すべての回答結果を利用者のニーズとして受け止めた。

アンケート項目は旧自然科学館への来館回数を尋ねるものから来館者の興味・関心を探るものまで多岐に渡ったが、本報告ではその中から学習館のリニューアルに関連する6項目に着目して分析を行った（表1）。各設問の回答方法は記述式ではなく、選択式が採用された。Q1・Q2・Q3・Q5に関しては複数回答を許可し、回答者のすべての要望がアンケート結果に反映されるように配慮した。アンケートの項目は3年間を通して統一されておらず、年度ごとに新規項目が加えられたり、前年度に用いられた設問が削除されたりしたため、それぞれの設問によって得られた回答者数（n）が異なった（結果参照）。

## ■結果

山陰海岸国立公園（浦富海岸）に対する来館者の関

心事および旧自然科学館（学習館）に対する要望が問われたQ1-3（図2a, b；図3）では、浦富海岸の特徴である海岸景観とともに、そこに生息する生き物への関心が高く、「海洋生物の水槽展示」と「参加体験型展示」を求める声が多いことが明らかとなった。浦富海岸の魅力が問われたQ1では風景（28.8%）に次いで動物（20.2%）が挙げられたのに対して（図2a），山陰海岸国立公園（浦富海岸）のどんなことを知りたいかを問われたQ2では風景に対する要望（12.8%）は減少し、魚などの動物に対する要望（28.0%）が増加した（図2b）。また、旧自然科学館（学習館）に対して具体的にどのような展示を望んでいるかを尋ねたQ3では、「水槽での生きている魚などの展示」に対する要望が最も多く（62.3%、n=551）、次いで「参加体験型の展示」への要望が多かった（47.5%）（図3）。

旧自然科学館（学習館）に対する満足度および具体的な改善点が問われたQ4-6（図4a, b；図5）では、80%以上の回答者が「おもしろかった」と「山陰海岸自

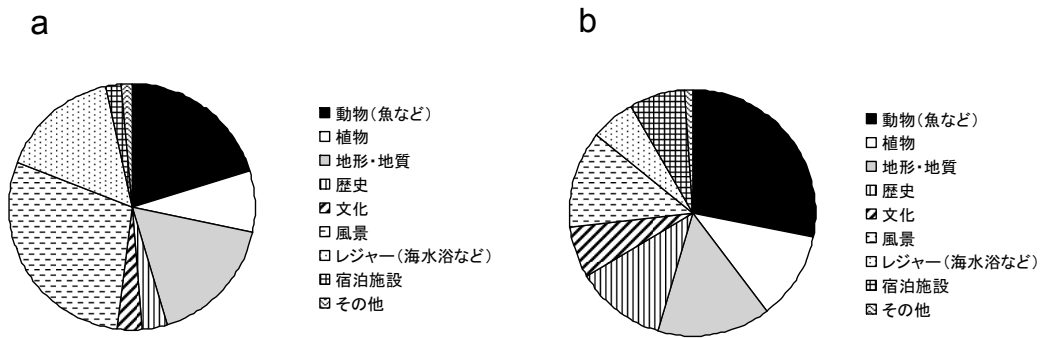


図2. 山陰海岸国立公園（浦富海岸）に対する来館者の関心事および山陰海岸自然科学館（山陰海岸学習館）に対する要望. a: Q1 (n=100); b: Q2 (n=559)

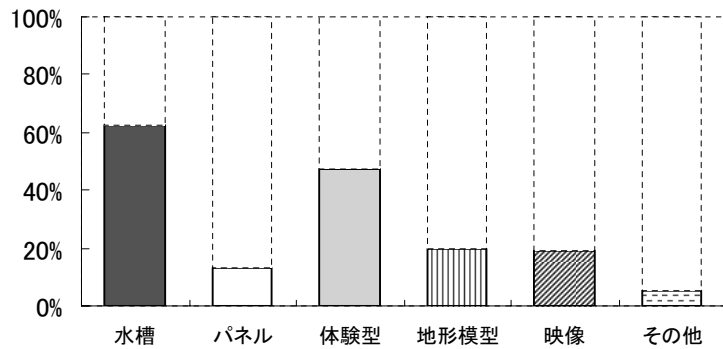


図3. 山陰海岸自然科学館（山陰海岸学習館）に対する具体的な要望 (Q3, n=551).

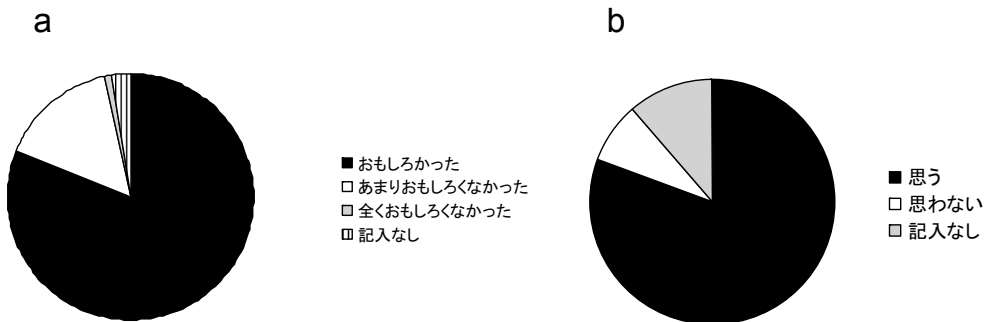


図4. 山陰海岸自然科学館（山陰海岸学習館）に対する満足度. a: Q4 (n=709); b: Q6 (n=709)

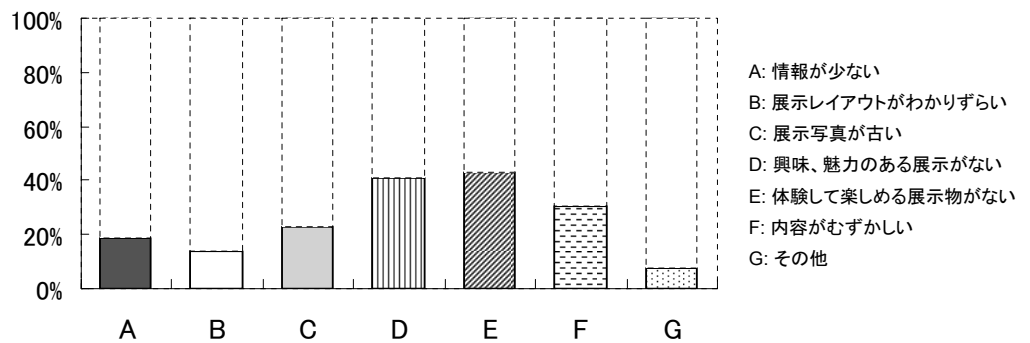


図5. 山陰海岸自然科学館（山陰海岸学習館）に求められている改善点 (Q6, n=138).

然科学館にまた来たいと思う」を選択したのに対して (図4 a, b), 求められた改善点は「体験して楽しめる展示物がない」(42.8%, n=138), 「興味・魅力のある展示がない」(41.3%), 「内容が難しい」(30.4%), 「展示写真が古い」(23.2%), 「情報が少ない」(18.8%) と多岐に渡る内容であった (図5)。

## ■考察

複雑に入り組んだ岩礁帯が透明度の高い海に面する浦富海岸は、山陰海岸国立公園を代表する景勝地として知られており (森田・立松 1995), 今回のアンケート調査においても浦富海岸の景観への関心の高さが認められた (図2a)。しかし、旧自然科学館 (学習館) に対する利用者のニーズは、海岸景観よりもその豊かな自然環境に生息する生き物たちに向けられていた (図2b)。この理由として、海岸景観に関する情報が多くの観光ガイドブックや遊覧船 (山陰松島遊覧株式会社: <http://www.yourun1000.com/>) などによって容易に得られるのに対して、山陰海岸の海洋生物や動植物に関する詳しい情報が提供されていない現状が考えられる。山陰海岸国立公園内では唯一、兵庫県豊岡市の竹野スノーケルセンター・ビジターセンター (<http://www.takeno-scvc.jp/>) が海中の生き物の観察会などを積極的に行っている (環境省 2006)。また、回答者の年齢によるバイアスも原因の一つとして考えられる。アンケート回答者の約半数が動的な展示に興味を示す10歳以下から20歳までの若年齢層であったために (図1b), 生きていた魚などの生態展示を望む声が割合として多くなった可能性が高い。しかし、学習館は自然を大切にする豊かな心を育むことを目的としていることから、小学生程度の子供たちが主な対象者であると考えられ、本アンケート結果は館の目的に沿った利用者の意見が概ね反映されたものととらえることができる。それゆえ、学習館のリニューアルに際しては「海洋生物の水槽展示」の充実が利用者のニーズであり、海の生き物の行動や生きざまの観察から興味・関心が湧き起こるような学習効果の高い生態展示が求められているであろう。

本アンケート調査から得られた、もう一つの重要な要望は「参加体験型の展示」である。近年、展示物を手で触ったり動かしたりできる“ハンズ・オン (Hands-on)”と呼ばれる参加体験型展示が多くの博物館や美術館などで見られるようになった (染川・吹田 1996; 大月 2003)。来館者が自ら参加して体感できるハンズ・オン展示は、静的な展示 (例えば、パネルや写真など) と比べて学習効果が高いとされ、自然科学の分野にお

いてもより深い理解と感動を与える理想的な展示方法と考えられている (Caulton 1998)。しかし、それぞれの展示資料に込められたメッセージを正確に伝えることができる“人”を配置できるかが重要な課題であり (渡邊 2006), 無人の展示室では来館者が得られる理解や感動は半減する。それゆえ、学習館のリニューアルに際しては、理解しやすく興味深い参加体験型の展示物を作成するとともに、自然科学に関する知識と情熱を持った解説員を常時配置できるかが鍵となる。

今回のアンケート調査では、旧自然科学館 (学習館) への高い満足度 (80%以上; 図4 a, b) が示された。このことは、学習館として再スタートしたばかりの当施設が存続していく価値を持っていることを示唆している。それを裏付けるように、旧自然科学館時代から実施されている「磯の観察会」などの野外活動は、現在でも多くの人々に親しまれている。今後は、山陰海岸の地の利を活かした野外活動を展開し続けるとともに、図5で示された多岐に渡る改善点を踏まえて、子供たちが楽しく学べる展示内容に更新する必要がある。その際に今回の利用者アンケートから得られた情報を反映させて、「海洋生物の水槽展示」と「参加体験型展示」を取り入れた施設のリニューアル事業を実現させることが県博に付置された学習館の次なる使命であろう。

## ■謝辞

本報告に関わるアンケート資料を提供し、その使用を快く許可して下さった鳥取県生活環境部公園自然課の皆様には厚くお礼申し上げます。また、回答用紙の収集と資料の分析に多大なご協力をして下さった旧自然科学館の西尾雄二館長と中島ちづる氏、および本稿に対して有益なご助言と建設的なアドバイスを与えて下さった鳥取県立博物館の川上靖博士と佐藤隆士博士に深く感謝する。最後に、アンケートにお答えくださったすべての方々には心から感謝申し上げます。

## ■引用文献

- Caulton, T. (1998) *Hands-on exhibitions: Managing interactive museums and science centres (The heritage, care-preservation-management)*. Routledge, London. 155 pp.
- 環境省 (2006) 平成18年度版 環境白書。ぎょうせい。280 pp.
- 清末忠人 (2000) *さんいん自然歳時記*。富士書店。245 pp.
- 森田敏隆・立松和平 (1995) *日本の大自然—山陰海岸国立公園—*。毎日新聞社。93 pp.
- 大月ヒロ子 (2003) *新・わくわくミュージアム—子供の想*

- 像力を育む世界の126館－. SSコミュニケーションズ. 127 pp.
- 染川香澄・吹田恭子 (1996) ハンズ・オンは楽しいー見て、さわって、遊べるこどもの博物館－. 工作舎. 242 pp.
- 鳥取県 (1993a) 鳥取県のすぐれた自然－動物編－. 鳥取県衛生環境部自然保護課. 327 pp.
- 鳥取県 (1993b) 鳥取県のすぐれた自然－植物編－. 鳥取県衛生環境部自然保護課. 275 pp.
- 渡邊昇 (2006) 科学を遊ぶ. In: 博物館の学びをつくりだすーその実践へのアドバイザーー. ぎょうせい. pp 19-38.